

2023年度

K 3—2

国 語

2月25日(土)

人文社会科学部 (経済学科)

16 : 25 ~ 17 : 15

【前期日程】

注 意 事 項

試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙、下書き用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(1枚)に受験番号を記入しなさい。

試験開始後

- 3 この問題冊子は、4ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙、下書き用紙を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者申し出なさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)
- 5 文字数制限のある解答用紙の記入については、下記の点に留意すること。

- ・書き出しは、一マスあけない。
- ・改行したら、最初の一マスをあける。
- ・句読点は、それぞれ一マス使う。行の末尾については文字と同じ一マスに含める。
- ・小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」はそれぞれ一マスで使う。
- ・英数字は一マスに2文字入れてよい。

- 6 問題は、声を出して読むではいけません。
- 7 配点は、比率(%)で表示してあります。

試験終了後

- 8 問題冊子と下書き用紙は、必ず持ち帰りなさい。

次の文章は、斎藤幸平著『人新世の「資本論」』から一部を抜粋したものである。文章を読んで設問に答えなさい。(配点四〇%)

(注一)
「人新世」の資本主義と環境危機の関係を分析するにあたって、まずは、グローバル・サウスに目を向けてみよう。グローバル・サウスとは、グローバル化によって被害を受ける領域ならびにその住民を指す。グローバル・サウスの抱える問題は、以前なら「南北問題」と呼ばれていた事象だ。ただ、新興国の台頭や、先進国への移民増大によって、「南北」格差は地理的位置との関係が必然ではなくなりつつある。そのため、本書では、グローバル・サウスという言葉を使いたい。

ともかく、旧来の南北問題も含め、資本主義の歴史を振り返れば、先進国における豊かな生活の裏側では、さまざまな悲劇が繰り返されてきた。いわば、資本主義の矛盾がグローバル・サウスに凝縮されているのである。

近年の大きな事件に絞ってみても、イギリスのBP社が引き起こしたメキシコ湾原油流出事故、多国籍アグリビジネスが乱開発を進めるアマゾン熱帯雨林での火災、商船三井が運航する貨物船のモーリシャス沖重油流出事故など枚挙にいとまがない。

(中略)

これらの事故は単なる「不運な」出来事なのだろうか。いや、そうではない。事故が起こる危険性は、専門家や労働者、住民たちによって繰り返し指摘されてきた。それにもかかわらず、国や企業はコストカットを優先して、有効な対策を取らず放置してきたのである。これらは、起こるべくして起きた「人災」なのだ。

そうはいつても、遠く離れたメキシコやブラジルで起きた事故など、日本人の関心は及ばないかもしれない。自分にはまったく関係ないと思う読者もあるだろう。だが、この「人災」に、私たち日本人も、間違いなく加担してきた。

自動車の鉄、ガソリン、洋服の綿花、牛井の牛肉にしても、その「遠い」ところから日本に届く。グローバル・サウスからの労働力の搾取と自然資源の収奪なしに、私たちの豊かな生活は不可能だからである。

ドイツの社会学者ウルリッヒ・ブランドとマルクス・ヴィッセンは、グローバル・サウスからの資源やエネルギーの収奪に基づいた先進国のライフスタイルを「帝國的な生活様式」(imperial Lebensweise)と呼んでいる。

帝國的な生活様式とは要するに、グローバル・ノースにおける大量生産・大量消費型の社会のことだ。それは先進国に暮らす私たちにとっては、豊かな生活を実現してくれる。その結果、帝國的な生活様式は望ましく、魅力的なものとして受け入れられている。だが、その裏では、グローバル・サウスの地域や社会集団から収奪し、さらには私たちの豊かな生活の代償を押しつける構造が存在するのである。

問題は、このような収奪や代償の転嫁なしには、帝國的な生活様式は維持できないということだ。グローバル・サウスの人々の生活条件の悪化は、資本主義の前提条件であり、南北の支配従属関係は、例外的事態ではなく、平常運**転**なのである。

ひとつ例を挙げよう。私たちの生活にすっかり入り込んだファスト・ファッションの洋服を作っているのは、劣悪な条件で働くバングラデシュの労働者たちである。二〇一三年に、五つの縫製工場が入った商業ビル「ラナ・プラザ」が崩壊し、一〇〇〇人以上の命が犠牲になる事故があったのは有名だ。

そして、バングラデシュで生産される服の原料である綿花を栽培しているのは、四〇℃の酷暑のなかで作業を行うインドの貧しい農民である。ファッション業界からの需要増大に合わせて、遺伝子組み換えの綿花が大規模に導入されている。その結果、自家採取の種子が失われ、農民は、遺伝子組み換え品種の種子と化学肥料、除草剤を毎年購入しなくてはならない。干ばつや熱波のせいで不作ともなれば、農民たちは借金を抱えて、自殺に追い込まれることも少なくない。

ここでの悲劇は、帝國的な生活様式による生産と消費に依存しているグローバル・サウスも、グローバル資本主義の構造的な理由から、この平常運**転**に依存せざるを得ないことにある。

(中略)

もちろん、このような耳の痛い指摘は、これまでも何度もなされてきた。けれども、私たちは、いくばくかのお金を寄付するくらいで、すぐにまた忘れてしまう。すぐに忘れることができるのは、これらの出来事が、日常においては不可視化されているからである。

ミュンヘン大学の社会学者シュテファン・レーセニツヒは、このようにして、代償を遠くに転嫁して、不可視化してしまうことが、先進国社会の「豊かさ」には不可欠だと指摘する。これを「外部化社会」と彼は呼び、批判するのだ。

先進国は、グローバル・サウスを犠牲にして、「豊かな」生活を享受している。そして、「今日だけでなく、明日も、未来も」この特権的な地位を維持しようとしているとレーセニツヒは断罪する。「外部化社会」は、絶えず外部性を作り出し、そこにさまざまな負担を転嫁してきた。私たちの社会は、そうすることのみ、繁栄してきたのである。

先進国の資本主義とグローバル・サウスの犠牲の関係について、もっと有名なイマニユエル・ウォーラー斯坦の「世界システム」論を使って、簡単にまとめてみよう。

ウォーラー斯坦の見立てでは、資本主義は「中核」と「周辺」で構成されている。グローバル・サウスという周辺部から廉価な労働力を搾取し、その生産物を買**か**い叩**た**くことで、中核部はより大きな利潤を上げてきた。労働力の「不等価交換」によって、先進国の「過剰発展」と周辺部の「過小発展」を引き起こしている、ウォーラー斯坦は考えたのだ。

ところが、資本主義のグローバル化が地球の隅々まで及んだために、新たに収奪の対象となる、「フロンティア」が消滅してしまった。そうした利潤獲得のプロセスが限界に達したということだ。利潤率が低下した結果、資本蓄積や経済成長が困難になり、「資本主義の終焉」が謳われるまでになっている。ただ、この章で指摘したいのは、その先の話である。ウォーラーステインが主に扱っていた搾取対象は人間の労働力だが、それでは、資本主義の片側しか扱ったことにならないからだ。

もう一方の本質的側面、それが地球環境である。資本主義による収奪の対象は周辺部の労働力だけでなく、地球環境全体なのだ。資源、エネルギー、食料も先進国との「不等価交換」によってグローバル・サウスから奪われていくのである。人間を資本蓄積のための道具として扱う資本主義は、自然もまた単なる掠奪の対象とみなす。このことが本書の基本的主張のひとつをなす。

そして、そのような社会システムが、無限の経済成長を目指せば、地球環境が危機的状況に陥るのは、いわば当然の帰結なのである。要するに、ウォーラーステインの議論を拡張すれば、中核部は、資源を周辺部から掠奪し、同時に経済発展の背後に潜むコストや負荷を周辺部に押しつけてきたのである。

日本人の食生活の影の主役になっているパーム油を例に取ろう。パーム油は価格が安いだけでなく、酸化しにくいいため、加工食品やお菓子、あるいはファストフードなどでよく利用されている。

このパーム油が生産されているのが、インドネシアやマレーシアである。パーム油の原料となるアブラヤシの栽培面積は、今世紀に入ってから倍増しており、熱帯雨林の乱開発による森林破壊が急速に進んでいる。

急増するパーム油の生産の影響は、熱帯雨林の生態系の破壊だけではない。大規模な開発は、熱帯雨林の自然に依存してきた人々の暮らしにも破壊的な影響を与えている。例えば、熱帯雨林を農園として切り拓いた結果、土壌侵食が起き、肥料・農薬が河川に流出して、川魚が減少しているのだ。この地域の人々は、川魚からたんぱく質を取っていたが、それができなくなり、お金が以前より必要となった。その結果、金銭を目当てに野生動物、とりわけオランウータンやトラなど絶滅危惧種の違法取引に手を染めるようになったのだ。

このように、中核部での廉価で、便利な生活の背後には、周辺部からの労働力の搾取だけでなく、資源の収奪とそれに伴う環境負荷の押しつけが欠かせないのである。

それゆえ環境危機が引き起こす被害に、地球上の人々がみな等しく苦しむわけではない。食料やエネルギーや原料の生産・消費に結びついた環境負荷は不平等に分配されているのだ。

「外部化社会」として先進国を糾弾するレーゼニツヒによれば、このように、「どこか遠く」の人々や自然環境に負荷を転嫁し、その真の費用を不払いにすることこそが、私たちの豊かな生活の前提条件なのである。

〔出典 齋藤幸平著「人新世の『資本論』」、集英社新書、二〇二〇年、二四〇―三三三頁。ただし、常用漢字以外を含む単語にはルビを付け、原文の注、小見出しは省いた。また、原文にない(注一)と(注二)を追加した。〕

(注一) 人新世とは、ノーベル化学賞受賞者のパウル・クルツツェンによつて提唱された「人類の時代」という意味の新しい時代区分。人類が地球の生態系や気候に大きな影響を及ぼすようになった時代であり、現在である完新世の次の地質時代を表す語である。

(注二) 南北問題とは、主に北半球に位置する先進国と南半球に位置する開発途上国の間にある経済格差だけでなく、そこから生まれる貧困や教育、政治などの解決すべき問題を総称する語である。

設問 傍線部「それでは、資本主義の片側しか扱ったことにならないからだ。」とあるが、なぜ著者はそのように指摘するのか。本文に即して、著者の考えを四〇〇字以上五〇〇字以内で説明しなさい。

採点・評価基準(具体的基準)

教科・科目名	国語（前期日程試験：令和5年度）	問題番号	K3-2
対象学部・学科(課程)等	人文社会科学部（経済学科）		
出題のねらい	出題文全体をしっかりと理解し、設問を通して散りばめられている解答のヒントになる部分をストーリー立てて文章化し、著者の考えを要約する力を問う問題である。		
採点基準	<p>配点40%</p> <p>① 著者が批判的に指摘する先進国の資本主義とグローバル・サウスの犠牲の関係について概括的に把握できているか。</p> <p>② 著者の見解を指摘するうえで前提となる資本主義の構造を周辺部における労働力の搾取と捉えたウォーラーステインの見解についての的確に把握し、本文に即しながらまとめられているか。</p> <p>③ 資本主義による本質的な搾取対象は、周辺部の労働力だけでなく、地球環境全体であり、資源、エネルギー、食料も「不等価交換」によってグローバル・サウスから奪われていくという著者の考えが理解できているか。</p> <p>④ 上記のポイントを押さえながら、全体的にストーリー立てて解答が組み立てられているか。</p>		